特集

担い手の手から手へ

6年に及ぶ全村避難を経て、新たなふるさとづくりを進める飯舘村で、大きな推進力となっているのが「ふるさとの担い手」の取り組みです。

先駆者の挑戦が、新たな「担い手」の獲得につながっています。一方では全く新しい自分の夢に挑戦している「担い手」もいます。そして震災前の仕事を磨き直すベテランの「担い手」も。それぞれの「仕事」とその原動力となっている思いを聞きました。

間もなく刈り取りが始まるWCSのほ場（13区営農組合）

※WCS＝ホールクロップサイレージ

つなぐ 熱き思い

動き出した第2世代！農地の新たな担い手達

13区営農組合

13区営農組合の第２世代、左から、佐藤一也さん、今野秀美さん、細川栄喜さん、細川哲也さん。４人とも上飯樋地区の出身。父親と代替わりで加わった人も、２代そろって働く人もいます。

地域の農地を守りながら
やりがいある仕事を創る

「農地中間管理事業」を先駆的に活用して上飯樋地区（13区）の農地を集約。地域の担い手集団として、その農地の活用にあたってきた「13区営農組合」。任意の団体として立ち上げた組合を、令和元年の秋に法人化。全組合員が理事になるなど公平な運営を旨として、さらには農地を預ける地域の人への利益還元も図ってきました。

昨年以来、初期メンバーの息子さん世代の加入が続き、新しい戦力となっています。

代表の細川強さん（上飯樋）は、法人化の当初から、「この仕事が次世代にとって、よりよい仕事になるよう努めたい」と一貫して話していました。その思いが想定よりも早いスピードで、現実となっています。第２世代の加入は、この取り組みの継続に欠かせないもの。未来に思いをつないでいきます。

喜多方市の企業と共同で、工業製品に活用する「ケナフ」を試験栽培。他にもドローンを使った作業を受託するなど柔軟に業務の幅を広げ、広域的な活動にも積極的に取り組んでいます。

法人化前の令和元年、広大な遊休地にヒマワリを植えて農地の緑肥としました。「苦労があったと思います。この地道な取り組みがあってこその今です」と若い世代がその背中を追っています。